報告

新任期に実感する統合カリキュラムにおける保健師基礎教育の課題
～選択制教育のあり方を考える～

中田　涼子[1)]　井上　清美[1)]　奥野久美子[1)]

Issues of public health nurse basic education in the integrated curriculum understood by new and inexperience phase
～Consider the way of elective education～

Ryoko NAKATA，Kiyomi INOUE，and　Kumiko OKUNO

要　　旨

目的：統合カリキュラムで学修した卒業生が新任期に実感する保健師基礎教育における課題を明確にし、選択制教育のあり方を考察する。

方法：保健師として勤務する卒業生5名を対象にフォーカスグループインタビューを行い、内容を整理し分類を行った。

結果：学修して役立っている内容：【基礎知識】【演習と実習での家庭訪問におけるアセスメント・計画立案・展開】【実習での健康教育の実践】【実習での経験】【看護研究演習】不足あるいは強化して欲しい内容：【特定保健指導の具体的な計画立案・指導】【乳幼児の発達におけるスクリーニング】【複合的な課題のある事例対応】【様々な事例への対応】【優先度の判断根拠】【コミュニケーション技術】

考察：基礎教育の課題にある、基本を中心に対象に応じて柔軟に適用できる考え方や方法について、ロールプレイや事例検討を通して考え学びを深める具体的な体験学習の積み重ねが重要であると示唆された。

キーワード：保健師、基礎教育、新任期、課題、選択制教育

Abstract

Purpose: To clarify the issues of public health nurses' basic education as understood by graduates who have started work and who are bachelors of the integrated curriculum.

Method: Focus group interviews were conducted with five graduates who work as public health nurses in order to organize the classification of the content.

Results: The content classification was identified. The content that helped included basic knowledge;

1）保健科学部看護学科

assessment, planning, and deployment of home visits during practical training; experience of practical training; the practice of health education during practical training; and nursing research practices. The content that they regarded as insufficient, or for which they wanted enhanced content, included specific planning and training for health guidance, screening for infant development, complex cases corresponding with problems, a variety of cases, the basis for decisions about priority, and communication skills.

Discussion: Regarding the issues of the basic education, the ideas and methods that can be flexibly applied depend on the target of the basic education, and concrete experience to deepen learning, thinking through role-play, and case studies are suggested to be important.

Key words：Public Health Nurse，basic education，new and inexperience phase，issues，elective education

Ⅰ．はじめに

平成22年度保健師助産師看護師法の改正により、保健師国家試験受験資格取得のための保健師基礎教育の教育期間が6か月以上から1年以上に延長され、保健師基礎教育は大学選択制や大学専攻科、大学院など各大学が自身の教育理念・目標に基づいて選択が可能となった[1)]。神戸常盤大学保健科学部看護学科（以下、本学とする）では、ワーキンググループでの検討を重ね、平成24年度に統合カリキュラムから新カリキュラムへ移行し、保健師基礎教育は選択制となった。

本学では、平成20年の4年制教育の開設以来、現在までの卒業生のうち5名が、保健師としての就職希望を叶え市町村保健師として意欲的に保健師活動のスタートを切っている。しかし、彼らの受けた保健師基礎教育は統合カリキュラムの中で行われ、平成24年度より移行している新カリキュラムに比較すると授業科目や実習単位数が少ない状況で学んできた現状がある。統合カリキュラムの中では、保健師を目指していない学生も含めて臨地実習を行うことが求められていたことから、大学での教育について、臨地実習指導者からは、学生の学修へのモチベーションの低さや保健師基礎教育としての教育内容の不足が指摘されてきた。特に、保健師の働く場の中核を占める行政の実践現場では、保健師の分散配置や関わる対象が年々複雑化してきており、現任教育の課題として、新任期から保健師に求められる実践能力を高めることの必要性が叫ばれると同時に、基礎教育における到達度の向上も求められている現状である[2)]。

本学の健康支援看護学領域地域系では、平成24年度入学生からの新カリキュラムにて保健師養成課程（3年次から選択制：定員30名）を3名の教員体制で担当し、統合カリキュラムでの基礎教育内容を踏まえつつ、厚生労働省が示した「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」[3)] に向けて、新カリキュラムにおける基礎教育内容の検討を随時進めている状況にある。他大学等養成校においても新カリキュラムへ随時移行し、教育内容の検討がなされている現状にある。そこで、現時点では新カリキュラムの卒業生がいないことを踏まえ、統合カリキュラムの修了生が新任期に実感する保健師基礎教育の課題を明確にすることで、選択制となった新カリキュラムのあり方を考える有用な資料となると考え、本研究に取り組むこととした。

Ⅱ．研究目的

本研究は、本学の統合カリキュラム修了生が、新任期に実感する保健師基礎教育の課題を明確にし、新カリキュラムの選択制教育のあり方を考察することを目的とする。

Ⅲ．研究方法

1. 研究協力者

平成24年度・25年度卒業生のうち、保健師として勤務し研究の同意が得られた5名。5名に協力を依頼し、5名全員から同意を得た。

2. 研究期間

平成26年10月～平成27年3月。

3. 研究方法

保健師として勤務する卒業生5名を対象に、5名が大学に集える日を設定し、研究に同意が得られた後、インタビューガイドに沿ってフォーカスグループインタビューを実施した。フォーカスグループインタビューは、大学にある多目的室（15名程度収容、プライバシーが保護できる会議室）で行い、研究者1名が司会、1名が記録を行った。所要時間は1時間30分程度で行った。調査項目は、基礎教育の中で学修して役立っている内容、不足していた内容、強化して欲しい内容、保健師になってどう感じているか、とした。

同意のもと、IC レコーダーにインタビュー内容を録音し得られたデータから逐語録を作成し、調査項目に沿って語られた言葉の語彙や意味内容が類似するものを分類した。研究者には保健師基礎教育に熟練した者を含み、分析は研究者間で繰り返して行った。

4. 倫理的配慮

研究協力者が勤務する施設の所属長に研究協力の依頼をした後、研究協力者に文書と口頭にて、研究の趣旨、研究協力は自由意思であること、研究協力の可否により不利益は一切ないこと、得られたデータは研究以外には使用しないこと、などについて説明し、同意書への署名が得られた後、インタビューを開始した。神戸常盤大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。承認日は平成26年9月11日、受付（承認）番号は神常大研倫第14-12号である。

Ⅳ．結果

研究協力への同意が得られたのは5名であった。研究協力者の概要を表1に示す。保健師としての勤務年数は、1年目が3名、2年目が2名であった。5名とも市町村で勤務し、業務形態として、地区分担制・業務分担制併用が3名、業務分担制が1名、地区分担制が1名であった。主な業務内容として、母子保健が1名、母子・成人保健が1名、成人保健が1名、母子・成人・高齢者保健が1名、高齢者・障害者保健が1名であった。

インタビュー内容を整理し分類した結果、学修して役立っている内容と不足していたあるいは強化して欲しい内容が抽出できた。以下、大項目を【】、中項目を＜＞で示す。インタビューにて得られた内容はコードとし「」で示す。なお、分類の結果、大項目と中項目が同じ項目となる場合は【】で示した。学修して役立っている内容として、【基礎知識】【演習と実習での家庭訪問におけるアセスメント・計画立案・展開】【実習での健康教育の実践】【実習での経験】【看護研究演習】の5つの大項目が抽出された。

【基礎知識】は、＜基礎学習の定着＞＜基礎資料＞からなり、「学校での学びの基礎が土台となっている」「きちんと定着していたから思い出せた」や「学校のときの資料は持っている」など、大学での基礎的

表1　研究協力者の概要

協力者	保健師歴	所属先	人口（概算）	業務形態	主な業務内容
A 氏	2 年	F 市	150,000 人	地区分担制、業務分担制併用	成人保健
B 氏	1 年	G 町	14,000 人	業務分担制	高齢者保健・障害児者保健
C 氏	1 年	H 市	52,000 人	地区分担制	母子保健・成人保健・高齢者保健
D 氏	1 年	I 市	43,000 人	地区分担制、業務分担制併用	母子保健
E 氏	2 年	J 市	93,000 人	地区分担制、業務分担制併用	母子保健・成人保健

な学びは資料を大切にしながら定着することが出来ていることが分かった。

【演習と実習での家庭訪問におけるアセスメント・計画立案・展開】では、家庭訪問活動の対象である個人家族の情報の整理・アセスメント・訪問計画立案・評価、という一連の展開過程を、学内演習と臨地実習において複数回経験することにより、「学校と同じ形式で家族構成、順序立ててアセスメントができ、長期目標と短期目標を含む計画を立案できた」「身についていれば時間が無くても系統だて考えられる」のコードにあるように、基礎教育での学びが新任期の活動実践に結びついていることが分かった。

【実習での健康教育の実践】や、＜実習での会話＞＜実習での見学体験＞からなる【実習での経験】は、「健康教育の場でみなさんに分かってもらうことを考えることにつながっている」「実習では見るだけだけど発達面や見る視点が役立っている」にあるように、基礎教育の中での臨地実習経験や体験が新任期の保健師活動に役立っていることが分かった。

さらに、【看護研究演習】という科目の学びが、「活動の説明のために研究の考えやまとめ方が役立っている」とあるように＜まとめ方＞＜数字の根拠づけ＞として学ぶことが出来ていたことが分かった。

一方、インタビューでは、不足していたあるいは強化して欲しい内容についても多く語り合われた。大項目として【特定保健指導の具体的な計画立案・指導】【乳幼児の発達のおけるスクリーニング】【複合的な課題のある事例対応】【様々な事例への対応】【優先度の判断根拠】【コミュニケーション技術】【パソコン操作の基礎から応用】の7つが抽出された。

【特定保健指導の具体的な計画立案・指導】では、「特定健診について具体的に知っておきたかった」があり、【乳幼児の発達におけるスクリーニング】は、中項目＜発達のスクリーニングの視点＞＜経験不足＞からなり、特定健康診査に関することと乳幼児の発達スクリーニングの学修はもっとあった方がよかったと5名とも語っており、基礎教育の中での強化内容となることが分かった。

【複合的な課題のある事例対応】は、＜課題のある母子への対応＞＜精神保健への対応＞からなり、発達の遅れがある場合や、気持ちが不安定な母への声掛けや接し方についてなど、何らかの課題を抱えている事例への対応について、基礎教育の中で強化して欲しい内容であることが分かった。また、【様々な事例への対応】があり、「色々なケースへの対応」を求めていることも分かった。

さらに、【優先度の判断根拠】は＜優先順位のつ

表2　学修して役立っている内容

大項目	中項目	コード
基礎知識	基礎学習の定着	学校での学びの基礎が土台になっている
		勉強してなかったら無理
		きちんと定着していたから思い出せた
	基礎資料	学校の時の資料は持っていく
		発達面の冊子、観察の視点
演習と実習での家庭訪問におけるアセスメント・計画立案・展開	家庭訪問事例の展開演習	新人研修で事例の展開をした
		学校と同じ形式で家族構成、順序立ててアセスメントができ、長期目標と短期目標を含む計画を立案できた
		身についていれば時間が無くても系統だて考えられる
		演習での赤ちゃん訪問
		教員からの指導内容
		演習での模擬事例も参考にできた
	実習での計画立案	実習で使った計画書
実習での健康教育の実践		現場で健康教育をする機会はあり役立っている
		健康教育の場でみなさんに分かってもらうことを考えることにつながっている
実習での経験	実習での会話	実習で何気なく話をしていた経験が現場でもコミュニケーションに活かされている
	実習での見学体験	実習では見るだけだけど発達面や見る視点が役立っている
看護研究演習	数字の根拠づけ	実際、研究して流れが分かっているので、数字の根拠づけに役立っている
	まとめ方	活動の説明のために研究の考えやまとめ方が役立っている

け方＞＜複数業務での優先順位の判断＞からなり、実際の保健師活動の中で様々な事例への対応を求められ、その中での優先順位のつけ方や判断根拠について、基礎教育の中で「優先順位のためのディスカッション」「ワーク」といった方法などで強化して欲しいと思っていることが分かった。

【コミュニケーション技術】は、＜基本のコミュニケーション技術＞＜コミュニケーションの工夫＞からなり、「面接の仕方」「傾聴の仕方」といったコミュニケーションの基本技術に加えて、「人によって言い方を変えないと通じない」といった対象に応じたコミュニケーションの工夫が必要な場面を経験することがあり、基礎教育の中で強化して欲しい内容として語られていた。

【パソコン操作の基礎から応用】では、「パソコン操作が大変」「ワードもエクセルも足りない」とあり、基本操作から応用までを含んだ教育を求めていることが分かった。

表3　不足していたあるいは強化して欲しい内容

大項目	中項目	コード
特定保健指導の具体的な計画立案・指導		特定健診の指導、計画立案をもっと詳しく知りたかった
		特定健診について具体的に知っておきたかった
		特定保健指導の場面、現場のスピードは早く、瞬時の判断を求められる
乳幼児の発達におけるスクリーニング	発達のスクリーニングの視点	股関節の開きの加減が分からない、感覚が分からない
		スクリーニングの境界が分かりにくい
		多動や言葉が出てこないなど最初は分かりにくい
		見る視点が分からず、学校での資料をすべて復習していった
	経験不足	赤ちゃん訪問の回数が少なく、先輩に聞ける時期も過ぎたが、まだスキルが身についていない
複合的な課題のある事例対応	課題のある母子への対応	発達障害だとか、気持ちが不安定のお母さんへの声掛け、接し方など
		支援ネットで情報はあるが、行ってみないと分からない、若年や高齢のお母さんなど色々
		発達の遅れがある場合、それを認められない、前の言い方は通じたがこの人には通じなかったときなど
	精神保健への対応	精神面とか特別なケースへの配慮は実習とかでは難しいが、実際はぽんと行くことがあり、不安も大きい、どうしたらよいのか、と不安ある
		精神関係への支援では戸惑うことがある
		新生児訪問で母が統合失調症、精神を抱えているお母さん、赤ちゃんのこれから面倒みていけるかな、周りのひとはどれくらいサポートできるかどうかなどについて１回で判断してこないといけない
様々な事例への対応		色々なケースへの対応
		ケースの事例の対応の仕方について、いくつかの事例について話し合う機会があっても良い、こんな場合はこことつなぐ、など
		おおざっぱなお母さんと細かいことが気になるお母さんなど
優先度の判断根拠	優先順位のつけ方	優先順位の為のディスカッション
		優先順位を決めて何分で行く、などワークがあれば
	複数業務での優先順位の判断	一度に結果が返ってきたときに何からすべきかを自分たちで選ぶなどのワーク
		ランク付けの基礎と他の要素を考えながら、混在している中で同時のときどちらを優先するか、焦点化したワーク良い
コミュニケーション技術	基本のコミュニケーション技術	面接の仕方、傾聴の仕方
		話の聞き方、返し方、声のかけ方、毎回困っている
	コミュニケーションの工夫	コミュニケーションの仕方聞き方によって情報が違ってくることがあると知った
		色んな方から電話あり、常連もいたり、病気ではないが何かしら持っている人たちからいきなりかかってくる。振り返れば、何と声をかけてあげたら良かったのか、いつも迷う
		うまく言おうとしてもちゃんと分かってもらえない、分かってもらえる場合もあるが、人によって言い方を変えないと通じない、と感じている
パソコン操作の基礎から応用		PC 操作が大変
		ワードもエクセルも学内では足りない
		基本的なところが分からなかった

Ⅴ．考察

インタビュー結果より、基礎教育の中で役立った内容としては、特に家庭訪問活動における一連の展開過程について学内演習や臨地実習で実際の事例を展開できたことや、臨地実習において健康教育という保健指導の一部実践の経験が得られたことが挙げられ、基礎教育の中で基礎資料を活用しながら基本知識を中心に、複数回経験すること、実践することが大変有効であることが分かった。

一方、不足していたあるいは強化して欲しい内容としては、幅広い年齢層や様々な背景、複合的な課題のある住民への具体的な対応の技術や方法に関する内容が多く出された。限られた基礎教育の時間の中で、基本の知識と技術を中心に教授しているが、現場に出るとたちまち様々な対象と出会うことを5名とも実感しており、そこでの対応への迷いが大きいことが分かった。インタビューすることで基礎教育における具体的な強化内容について、現在の新カリキュラムの中で工夫できる要素として考察していく。

1. 専門科目における学内演習でのロールプレイやグループワークの工夫

本学における統合カリキュラムと新カリキュラムにおける専門科目の名称について表4に示す。

強化して欲しい内容として抽出された中で、特に【様々な事例への対応】【優先度の判断根拠】【コミュニケーション技術】の3つの大項目については、統合カリキュラム時より増加した科目及び単位数の中で補うことが重要であると考える。統合カリキュラムでは、全体的に講義演習の時間数が少なかったこと、さらに学部生全員が受講する中で、特に演習において1グループあたりの学生数が多くなったり、グループ数そのものが多かったりし、教員3名で密にかかわり教授することが大変難しい状況であったといえる。新カリキュラムに移行し、保健師課程が選択制となり1学年20～30名程度が選択しており、講義や演習において学生の学修状況が捉えやすくなったと感じている。また、新カリキュラムでは科目が細かく設定されたことで、科目ごとの到達目標も認識しやすくなったと感じている。

【様々な事例への対応】では、演習時により多くの事例を取り上げ、課題別・対象別にアセスメントする学修を積むことが重要であると考える。「ケー

表4　本学における保健師基礎教育科目：統合カリキュラムと新カリキュラムにおける科目名称と単位数

統合カリキュラム（平成 20～23 年度）	新カリキュラム（平成 24 年度～）
地域看護学概論（1） 地域看護特性論（2） 地域看護活動論 1（2） 地域看護活動論 2（2） 健康支援実習Ⅲ（地域）(3) 保健医療福祉行政論（1）	地域看護学概論（1） 公衆衛生看護概論（2） 公衆衛生看護展開論Ⅰ（1） 公衆衛生看護展開論Ⅰ演習（1） 公衆衛生看護展開論Ⅱ（1） 公衆衛生看護展開論Ⅱ演習（1） 健康教育の理論と方法（1） 公衆衛生看護管理論（1） 保健医療福祉行政論（1） 疫学的調査法（2） 公衆衛生看護実習Ⅰ（2） 公衆衛生看護実習Ⅱ（3）

スの事例の対応の仕方について、いくつかの事例について話し合う機会があっても良い。こんな場合はここととつなぐ、など」というコードにあるように、グループワークをしながら事例の展開方法や支援の方向性について、調べ話し合う時間を多く設けることも有効と考える。これは、【優先度の判断根拠】にもつながる学修であり、具体的な事例を展開する中で、どの事例を優先的に支援していくのか、その判断根拠は何か、そしてどのような支援が必要なのか、などをグループワークすることで、学生自身の考える能力につながっていくと思われる。

また、【コミュニケーション技術】においては、1年次からの基礎看護学をはじめ看護師課程の中でも頻繁に取り上げられ、技術の研鑽はなされているが、それでも実際に勤務し出すと大学で練習し経験したコミュニケーション以上の技術がすぐに求められることが考えられる。特に保健師活動では、短い時間の関わりの中で対象者の思いを引き出し、ニーズを把握し支援の方向性を考える能力が求められており、学内演習でのロールプレイにおいて、保健師活動ならではの場面をいかに設定し学生自身が真剣に取り組み実践できるような組み立てが重要であると考える。田上は、生活者としての人間力の弱さ、コミュニケーションの弱さが現在の学生にはある[4]としており、こうしたことを学内の講義だけで学ぶのは難しいといえる。臨地実習を含め、体験的・体感的に学べる機会の工夫が重要であると考える。

2. 臨地実習及び実習前後の取り組みの工夫

インタビュー結果より、臨地実習での経験は見学が主な実習内容であっても、保健活動の実際に触れ、観察し、活動の意義や目的、目指す方向などを臨地実習指導者から学ぶことは、学生にとり大きな学びとなっていることが分かった。ゆえに、【乳幼児の発達におけるスクリーニング】が強化して欲しい内容と抽出されたことに対して、臨地実習での乳幼児健康診査や発達フォロー教室などを通して、乳幼児とその保護者と出会える機会を増やす、学内演習で事例や場面を想定したロールプレイを実施するなどが有効であると考える。特に乳幼児の発達のスクリーニングは、人口が少なく出生数が少ない地域で勤務すると、新任期から経験する機会そのものが少なく、スクリーニングの視点が育ちにくいことがインタビューから考えられた。母子保健活動としてすべての乳幼児と出会い課題の早期発見は重要な支援の1つであり、スクリーニングの視点を基礎教育の中で身につけておくことは大変重要であるといえる。

また、【複合的な課題のある事例対応】は、サブカテゴリー＜課題のある母子への対応＞＜精神保健への対応＞からなり、インタビューでは具体的に対応に困っている状況について語り合われ、5名とも地域で支援を必要としている対象者の生活背景や抱えている健康課題の複雑さを感じ、対応に困難を感じていることが考えられた。学内では、基本の事例を中心に教員が意図的に、複数の健康課題を抱えている、あるいは潜在的な健康課題がある、などの事例を取り上げ、支援の展開過程を考えることが大切であり、特に臨地実習において学内演習では得ることの難しい対象者の様子や情報を詳細に得ることから、実習前後の事例展開は大変有効と考える。

本学では、公衆衛生看護実習を2期（3年次後期・4年次前期）に分けて実施しており、1回目の実習で、現場に身を置くことによる保健師の具体的な活動を捉えた上で、2回目の実習までの間に、複数事例の展開や具体的な対応について学修する機会を設けることで、より効果的な実習につなげることが可能であることが示唆された。

保健師の分散配置などが増加し、保健師の新人教育体制が課題となる中、基礎教育における保健師の実践力育成の充実がこれまで以上に求められている、と小山田[2]は言っており、保健師基礎教育にて講義・演習・実習と連動した学修体系を構築し、卒業時到達度目標に向かい、基礎教育内容の検討を引き続き進めていきたいと考える。

Ⅵ. 結論

本研究で、新任期の保健師が実感する統合カリキュラムにおける基礎教育内容の課題が明確になり、本学における新カリキュラムでの講義・演習・実習の教育内容を考える要素となった。テキスト等にある基礎知識を基本に、支援を必要としている多様な対象に応じて、柔軟に対応策や支援策を具体的に検討できる考え方や方法について、学内演習と臨地実習双方で複数回経験することが学びの定着には有効であることが分かった。また、様々な事例への対応や複合的な課題のある事例への対応については、特に一度実習を体験した後、ロールプレイや事例検討を重ねて、対象者の生活の実態を考え、セルフケア能力を引き出し、必要とする支援は何かを考えていく能力を養うことが重要であることが示唆された。さらに、複雑事例や課題が多い対象者へのコミュニケーションスキルの低さも実感しており、合わせて学内での講義・演習で強化すべき内容だと考える。

Ⅶ. 研究の限界

本研究は、統合カリキュラム修了生5名によるフォーカスグループインタビュー結果であり、データが小さく内容に偏りがある可能性がある。また、フォーカスグループインタビューという手法により、他者の意見に左右されやすい、自由な意見が出にくい、といったデータ収集の課題による偏りがあることも考えられる。さらに、修了年度に違いがあり卒業後の保健師勤務歴、従事している業務内容にも違いがあるため、基礎教育を回顧してのインタビュー内容に実際の業務が強く反映されている可能性があり、一概に不足していたあるいは強化して欲しい内容といえないことが本研究の限界である。

本研究にご協力頂きました卒業生のみなさまに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

本研究は、神戸常盤大学平成26年度テーマ別研究費の助成を受けて実施したものである。

文献

1) 村嶋幸代 . 修士課程における保健師教育 . 保健の科学 . 2009, 第51巻, 第10号, p663-670.
2) 小山田恭子 . 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 . 保健の科学 . 2009, 第51巻, 第10号, p653-655.
3) 岡本玲子, 佐伯和子, 今井睦子他 . ミニマム・リクワイアメンツを教育の指針に . 保健師ジャーナル . 2013, vol.69, No.9, p692-697.
4) 田上豊資 . 地域（現場）が求める保健師活動と保健師教育への期待 . 公衆衛生 . 2010, Vol.74, No.7, p548-551.
5) 佐伯和子 . 保健師の専門性を強化するための基礎教育 . 保健の科学 . 2013. 第55巻, 第2号, p92-96.
6) 平野かよ子 . 日本公衆衛生学会が考えた「保健師教育コアカリキュラム」. 保健の科学 . 2009, 第51巻, 第10号, p671-675.
7) 平野美千代, 佐伯和子, 上田泉他 . 行政機関の保健師に求められる政策に関する能力と必要な保健師基礎教育の内容 . 日本公衛誌 . 2012, 第59巻, 第12号, p871-878.
8) 山口佳子 . 大学における保健師基礎教育制度のあり方に関する卒業生の意見 . 保健師ジャーナル . 2010, Vol.66, No.03, p244-251.